

ひいひしらすあはれにやさしき御ことなり、

〔平家物語三〕少將みやこかへりの事

正月げじゆん三〇治承に、丹波の少將なりつね平判官やすより入道、二人の人々は、肥前の國かせ

のじやうを立て、都へといそがれけれども、中二月十日ごろにぞ、備前のこじまにはつき給ふ

それより父大納言殿治承元年薨の御わたり有なる、有木の別所とかやにたづね入て見給へ

ば、竹のはしら、ふりたるしやうじなどに、かきをき給ひつる筆のすさびをみ給ひて、あはれ人の

かたみには、手跡にすぎたる物ぞなき、かきをき給はずば、いかでか是を見るべきとて、やすより

入道と二人、よみてはなき泣てはよむ安元三年七月廿日出家、おなじき二十六日、のぶとし下向

ともか、れたり、さてこそ源左衛門のせうのぶとしが、まいりたるをもしられけれ、そばなるか

べには、三尊らいがうたより有九品わうじやう疑なしともか、れたり、此かたみを見給ひてこ

そ、さすが欣求浄土ののぞみもおはしけりと、かぎりなきなげきの中にも、いさ、かたのもしげ

にはのたまひけれ、

〔吾妻鏡〕治承四年十月廿一日庚子、令遷宿黃瀬河給、源賴朝、中略今日弱冠一人、御旅館之砌、稱可奉謁、

鎌倉殿之由、實平、宗遠、義實等、恠之、不能執啓、移剋之處、武衛自令聞此事給、思年齡之程、奥州九郎歟、

早可有御對面者、仍實平請彼人、果而義經主也、即參進御前、互談往事、催懷舊之淚、

〔十六夜日記〕人やりならぬ道なれば、いきうしとて、まゝまるべきにもあらで、なにとなくいそ

ぎたちぬ、中侍従大夫などの、あながちにうちくつしたるさま、いと心ぐるしければ、さまざま

いひこしらへ、ねやのうちをみれば、むかしの枕さへ、さながらかはらぬをみるにも、今さらかな

しくて、かたはらにかきつく、

とゞめをくふるき枕の塵をだに我たちさらば誰か拂はん